

パサリ氏のこと (三)

愛甲次郎

文語原稿

一日パサリ氏、マンモハン博士と會ふ氣はなきかと問ふ。博士は當時のインドの大藏大臣なり。パサリ氏の親友にシドゥー氏なるシーク教徒ありて、大臣の姻戚なりと言ふ。余咄嗟にこれ大臣の婉曲なる面談要請なりと解す。

以前余ソニーの盛田會長に何故にわが社はインドに進出せざるかと問へり。會長答へて曰く、過去の苦き經驗の故なり、我が眼の黒き内はインドと朝鮮とは商賣すること無かるべしと。余續けて、日本に住むは人間のみなれど、インドには人間のみならず餓鬼、畜生、果ては地獄の住人も存す、更に日本にはなき神の如きも存するなり、一度の經驗にて結論を出すは早計にあらずやと。會長、さらば神を連れて來たれ、幾たび出張すとも苦しからずと答へぬ。

その後一九九二年インド首相ナラシンハラオ投資誘致のため訪日せることあり。インド大使館の希望により盛田會長赤坂の迎賓館に首相を訪ふこととなり、余隨行す。首相最近のインドの政策大轉換を縷々説明し、ソニーの投資を要請す。會長、會社の金は株主のものなれば投資には慎重ならざるべからずと答へ、只今ここなるミスター・アイコウをインド擔當に任ずれば、貴下の部下をして彼に接觸せしめられよと告げぬ。會談はかくして手短に終へぬ。

シドゥー氏はターバンを巻き、美髯を蓄へたる小太りの紳士なり。彼の初印象はその穩やかなる口調なりき。余とパサリ氏を伴ひ、大藏省に大臣を訪れぬ。マンモハン氏は村夫子然たるシーク教徒にしてその髯に白きもの多く交りたれば實際より老けて見えぬ。インドの投資環境の劣惡なるを率直に認め、惡名高きインド官僚との折衝には能ふ限り援助を惜しまぬことを約しつつソニーの投資を慫慂す。余豫て盛田會長より投資の絶対條件は百パーセントの投資比率と聞き居たれば、この條件充たさるれば投資を検討すべきを約す。大臣、インド必ずやソニーの第二の故郷となるべしと言ひ、握手して別れぬ。大藏省の廳舎は、インドの新首都として二十世紀初頭に英國の建設せるニューデリーの中心に存し、赤き砂岩の廣壯なる建築にして、鳩の群舞ひ飛ぶ。これより後幾たびここを訪れしか知らず。マンモハン博士とは首相として再び相まみゆることとなる。

歸國後役員會に報告す。テレビ事業部、インドに工場進出の意欲あり、インド政府と交渉に入るべきこと決せらる。余との交渉相手となるはアルワリア大藏次官なりき。

インドは言語別に二十餘の州に分かれ、州政府米國のそれよりも大なる權限を有す。同國には英國統治時代より C I S (Indian Civil Service) と稱する名だたる行政官組織あり。中央政府と州政府共通の制度にしてこれにより兩者の一體的運用保障せらる。C I S の採用試験に合格せるエリート官僚は採用と同時に特定の州へ所屬せしめられ、その後は中央政府と當該州政府のポストを交互に經て昇進す。同年採用にて且つ所屬州を同

じくする官僚はカードと稱するグループを形成し、その絆は極めて強し。州政府のトップは政治家たる **chief minister** にして公選せらるるも、これを補佐し事実上州政府を統括するものは **chief secretary** と稱する C I S 官僚なり。大蔵次官はこの C I S 官僚の頂點に立つ。従ひアルワリア次官と合意に至れる事項は強固なる C I S の組織を通じて、實行を保證せらるるなり。